ヨーロッパの旅（二）

平井信義

ヨーロッパの旅で、異国の人々との触れ合いの中から感じ取るものは、いつも私の心の糧となり、帰国後にいろいろとものを考える素材ともなる。その一つは、相手の心のあり家であり、もう一つは文化的背景である。

相手の心のあり家は、感情の持ち方といってもよいし、親しみといってもよい感情である。初めて西ドイツに留学した時、私の恩師であるベンホルド・トムセン教授と自動車旅行をしたことがあった。その時に、「あなたはこの西ドイツにきて、まわりにいる人たちをどのように思いますか？」と質問された。

私は、しばらく考えていたが、「多くの人々が、私に親切にしてくれます」と答えた。その答えを追いかけるようにして教授が言われた言葉を、いまでも忘れることができない。「親切にしてくれる人々の心を感ずることのできるのは、あなたの心に親切というものがあるからなのですよ――」と。特に、ベン先生は私を子どものように可愛がって下さった。その数々については、のちに述べることになろう。それは、利害関係の全く感ぜられない打ち込み方であった。私は、わが国での師弟関係で得られなかった宝を、ベン先生から与えられた。人生のめぐりあいというものをしみじみと感ずる。ヨーロッパにいく度に、どうしても先生の顔をみずにはいられなかったし、今でも、もし我につばさありせば――という気持である。先生はいま、からだの具合が悪いのだ。

とにかく、心の触れ合いからくるさまざまな思いは、旅であるからこそ、脳裡に深く刻み込まれるのかもしれない。

もう一つの文化的背景というのは、親しい間柄であっても、どうしても打ちとけない部分を感ずる時に、頭に浮かんでくることである。それは、ベン先生にも、その他親しい人々にも感ずること

が度々あった。おそらく、相手は意識しないで行動しているのであろうが、その行動が、私の心をかき乱すことがいく度もある。その文化圏内では、その行動は本人に意識されていないことなのであろうが、われわれの文化の中では問題となることがあるものだ。また、親切ということを表現する際の表現の仕方が、われわれが日本にいて相手に期待するものとはちがうことがある。そのような経験を度重ねているうちに、理解ができるようにもなり、従って心を乱さずにすむことが多くなり、さらには、自分までが似たような行動を示すようになる。しかし、いつまでも理解ができずに、心が乱されたまま、それが心に残ってしまうことがある。そのようなちがいが、いったい、何によって生ずるのであろうか、—この点を考えることは、まことに興味深いし、子どものしつけの型を考える上でも意味がある。

今回のヨーロッパの旅においても、そのようなことが幾度かあった。私は、それを大切にした。

ストックホルムにて

ストックホルムは、十五年前に訪れたまま、その後訪問する機会に恵まれなかった町である。当時の市街は、掃き清められたように美しく、煙草の吸殻を捨てるにしのびないような気持がしたものだった。行き交う人もまばらであり、道をたずねると実に親切に教えてくれた。

地図を手にしてまごまごしている私のまわりに二人〜三人と集まってきて、目的地までの道をあれこれと検討してくれた。中には、施設までわざわざ案内してくれる人もあった。

スカンセンという丘陵にのぼると、ひと目で町が見下ろせる。そこで、八月初旬の夕暮を楽しんだのも、思い出として強く残っている。八時になっても、まだ太陽は西の空に高かったが、舞台になった円形の広場で、スエーデンの晴着を着た男女が、アコーディオンに合わせて幾組も踊り狂い、それを見ていると、時間のたつのも忘れるようであった。ようやく西の彼方に真赤な太陽が沈みかける時、ふと時計をみると、十一時を過ぎていた。朝も早く、窓外が明るく輝いているので驚いて飛び起きると、まだ午前三時であったのを思い出す。とにかく、清潔な町であった。

しかし、今度いってみると、かなりちがった印象をうけた。九月に入ってシーズンオフであるにもかかわらず、町の人通りは多く、枯葉に混って紙屑や果物の皮などがそこここで目についた。人人の動きがはげしくなり、数は多くはなかったが、ヒッピー族もその中に混っていた。通りに面したカフェーの椅子にもたれながら、十五年の歳月がいかに変化をもたらすものかと、心を沈ませた。十五年前の清潔さが、なぜ失われたのであろうか？　この町の人々の心が変ったのであろうか？　あるいは、外来者の不心得

な行動に抗しきれない状態なのであろうか？　それを確かめる術がなかったけれども、それがもし都市化の現象としてとらえられるとすれば、都市に住む人々の心のあり方が問われなければならないであろう。それは、幼い頃からの環境としつけとによることが考えられる。しかし、それに対してあるドイツ人が私に話してくれたことは、町の清潔は、その町で雇っている清掃人の数によることも考えられますね――ということであった。少なくともパリーはそうなのですよ――と。もしそうだとすれば、町の清潔は、それを維持しようとする人々の積極的な心のあり方とは余り関係のないことになる。確かに、町の住民が自分の家の周囲の道路を掃いているのを見たことがない。スエーデンのみでなく、ヨーロッパのどの町を歩いても、全く見たことがなかったと言えよう。その点、わが国では朝のひと時を、自分の家の周囲の道路の清掃に精を出している人々を見かけることが少なくない。このような傾向も、高層の建物が立ち、アパートに住む人が多くなるにつれて、だんだんに見られなくなってしまい、清掃人夫の仕事になってしまうのであろうか――このようなことを思いながら、カフェーの椅子から立ち上がったのである。

ストックホルムを訪問した目的は、市の南にある「アルスタの家」を見学することにあった。スエーデンの児童福祉について書いてあるものを見た時、自閉症児のための新しい施設と宣伝してあったのに、強く心をひかれたからである。現在、ヨーロッパにもアメリカにも、自閉症児のための施設はほとんどないといってもよい。何か新しいアイデアによってこの施設ができ、新しい治療教育の方法が用いられているかもしれない。私の心は躍った。

私どもを迎えてくれたのは、そこの教育主任の女の人と、精神科の医師とであった。「お待ちしていました」といってにこやかに迎え、主屋になっている三階建の家の階段を、一階から二階へ、二階から三階へとのぼっていった。そこに、広い応接室があった。窓から見下ろすと、広々とした庭園に青々と芝生が続き、それはどこが境かはっきりしないままに林に通じていた。主屋を中心にして右と左とに、平屋の家が三軒ずつ並んでいた。そこが、子どもたちの宿泊施設であり、広大な敷地に対して、小じまんりとした感じの施設であった。

さっそく、主屋にある教室のいくつかを見てまわった。中学生ほどの男の子と女の子とが五～六人、ひまわり草の絵を描いていた。ちえ遅れの子どもたちであることが一目でわかった。説明をきくと、この施設は、本来はちえ遅れの子どもたちのための施設であり、その中に五～六人の自閉症児が収容されているということであった。すなわち、自閉症児のための施設ではなく、自閉症児も収容されている施設であった。私は、ちょっとがっかりした。この施設で、本当の意味での自閉症児に対する治療教育が可

能なのであろうか？

次の部屋に入った時、六〜七歳ぐらいの男の子が足早に歩いてきた。私がその子に近寄っていったが、見向きもしない。その子どものあとを保母さんが追ってきて名前を呼んだが、ふり返るようすも示さない。表情も変わらない。自閉症児であることを直観した。私は、案内の女の先生に耳打ちして、「自閉症児ですか？」ときいた。しかし、その答えは、「よくわからない」ということであった。私は保母さんをつかまえて「何かこの子が得意なものはないでしょうか？」と質問した。しかし、その英語が通じなかったらしい。困ったような顔つきをしていた。精神科医が近寄ってきて、私の質問をスエーデン語に訳した。うなずいた保母さんは、棚のところに重ねてあった画帳をもってきた。それを私に渡そうとすると、その男の子が飛んできて奪い返し、椅子のところに持っていき、一枚一枚ひろげ始めた。私はすぐそのうしろにいって、その子どもの肩に手をかけ、めくられていく絵を眺めた。一枚一枚がかなり精巧に描かれている。「これは、スエーデンに伝わっている民話ですよ」と、精神科医が説明してくれた。「この絵から、その民話があなたによくわかりますか？」と私。「ええ、よくわかります」「知的能力は相当高いでしょう？」

私のこの質問に対し、答えは返ってこなかった。精神科医は、一人一人の子どもの認識ができていなかった。市役所につとめるコンサルタントで、月に一〜二回、管理の状況を見にくるにすぎないことが、あとでわかった。どうも、その子どもをちえ遅れの子どもとして見ているようすであった。私は、その子どもと少し遊んでみようと思ったが、「宿泊施設の方にいきましょう」と精神科医にうながされたために、断念した。この子どもぐらいの知的能力があり、そしてもし接触が可能である自閉症ならば、われわれは普通学級へお願いして、かなりよく適応させることができるのに——と思って、残念な気がした。まだまだ、自閉症児のための仕事は、この国でも遅れている。

主屋を出て、芝生におり立つ。すでに太陽は傾き、西日が家々や木々の影を長々とうつし出していた。二軒の宿泊施設の間に砂場がある。そこに、六〜七歳であろうか、女の子が二人、男の子が三人いた。私どもがすぐそばまで近づいていったが、全く関心がなかった。一人の男の子は、手をひろげて高くかざし、その間から空を眺めていた。その方を見上げると、大きな雲が北の方へとゆっくり動いていた。雲をみているのだということがはっきりと理解できた。他の男の子は、砂場に坐って、指のまたから何回も何回も砂を流していた。あきずにくり返される行動であった。

赤い帽子をかぶった女の子が頬からあごにかけてひげの生えた先生と手をつないで歩き始めたが、いきなりその手を噛もうとした。あわてて先生は手をふりほどいた。またつかんで噛もうとし

たが、先生はそれをふりほどいた。そのようなことを何回かくり返したあげく、先生から離れ、一人で施設の背後に姿を消した。どの子も口をきかなかった。ヒゲの先生と若い女の先生とがいたが、ほとんど言葉をかけなかった。特に女の先生は、ミニスカートをはき、ベンチに坐ったままであった。二人とも、ただ子どもを見守っているだけで、積極的な働きかけはしなかった。自閉症児には、もっともっと積極的な働きかけが必要である。それをしなければ、コミュニケーションは成立しない。どうして黙ってみているだけなのだろう。私は、歯がゆい思いがした。

見学を終わって応接室へ戻った。私は矢継早に質問した。「自閉症をどのように考え、どのように診断しているか？」「どのような治療教育の方法を用いているか？」「その効果はどうか？」また、「治療教育に当たっている人たちは、どのような訓練を受けているか？」――などなど。

しかし、精神科医は、「私は精薄児の専門家なので、自閉症児についてはよく知らない」と答え、「診断は大学病院の専門家によって行なわれ、症候群として考えられている」と、大雑把に答えるばかりであった。そして、「ここの子どもたちには、両親が費用を出す必要はないのです。全部、市の費用でまかなわれますから。しかし、私ぐらいの俸給者は、俸給の半分を税金に支払わなければならないのです」と、肩をすくめてみせた。

私は女の先生に向かって、教育の方法について質問してみた。「ここでは、いろいろな方法を用いています。たとえば、音楽療法とか舞踊療法を用いて、たいへん効果が上がっています」という答えであった。私は、「自閉症児にも、それらの方法を用いているのですか？」と質問した。「自閉症児にも用いますが、自閉症児とはっきり区別して教育しているわけではありません」――つまり、ちえ遅れの子どもといっしょに教育していることなのか、自閉症についての認識がはっきりしていないか、いずれかであると思った。急に、気が抜けるような思いがした。

施設はよく整い、広大な敷地がある。実にうらやましい。しかも、両親には経済的な負担がかかっていない。これもうらやましい。しかし、一人一人の自閉症児の認識と治療については、まだじゅうぶんに考えられていない段階にある。それでは、子どもの真の幸せは保障されていないといってもよい。

このことは、自閉症児の問題に限ったことではない。すべての特殊の問題をもっている子どもに通じる、普通の保育を受けている子どもたちにも当てはまることである。本当に一人一人の子どもについて認識しているであろうか？　一人一人の子どもについて保育が考えられているであろうか？　特殊な問題をもっている子どもたちは、すべての子どもたちを代表して、そのことを訴えているのである。